

保育専攻学生の乳幼児期口腔ケア教育についての考察 －短期大学生アンケート調査を基に－

武村順子, 桑迫信子, 小川美由紀

Consideration on infant oral care education for childcare
major students
: Based on a questionnaire survey of junior college students

Junko TAKEMURA, Nobuko KUWASAKO, Miyuki OGAWA

1.はじめに

2011（平成23）年に施行された「歯科口腔保健法」における基本理念において、「乳幼児期から高齢期までのそれぞれの時期における口腔とその機能の状態及び歯科疾患の特性に応じて、適切かつ効果的に歯科口腔保健を推進すること」¹が謳われている。これは、乳幼児期からの歯科口腔保健の推進、すなわち、乳幼児期の口腔ケアが重要であることが示されている。

これらの施策は、歯科領域疾患の早期発見、早期治療を推進することとなり、また、国民の健康志向の高まりも重なり、歯科領域疾患で医療機関を受診する割合を高める一因となっている。さらに、図1は厚生労働省（2017）「国民医療費の概要」による歯科疾患と主要慢性疾患の医療費の比較である。この図の説明によると、「歯科医療費（2.90兆円）は、第1位の悪性新生物（3.82兆円）に次いで第2位に位置していること。年齢階級別には、歯科疾患では高齢者以外の割合が高いとい

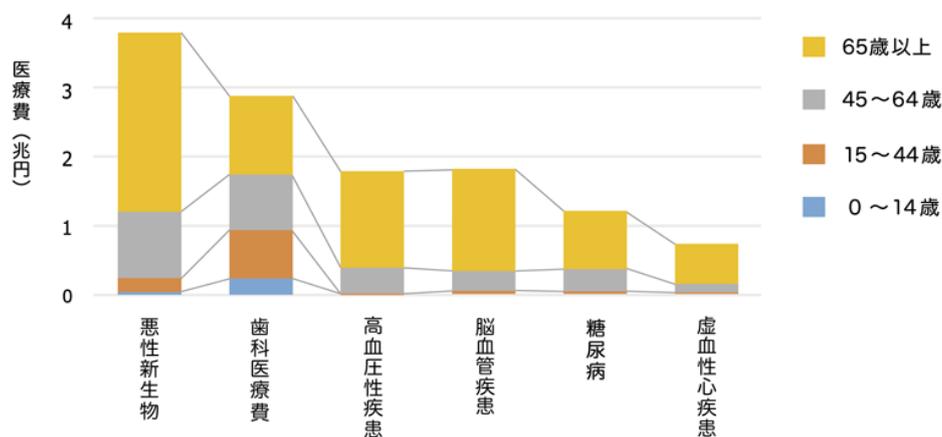


図1 歯科疾患と主要慢性疾患の医療費の比較（国民医療費の概要 2017年度）²

¹ 歯科口腔保健の推進に関する法律（平成23年法律第95号）

https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/shikakoukuuhoken/dl/01.pdf,
（最終閲覧日：2022年2月7日）。

² 厚生労働省（2017）「国民医療費の概要」<https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/teeth/h-01-002.html>,
（最終閲覧日：2022年2月8日）。

う特徴がある。」³と記されている。中でも、0～14歳での歯科医療費は他疾患と比較し高額になっている。次に、健康保険組合連合会（2020）「平成30年度の歯科医療費の動向に関する調査」から、歯科3疾患（①う蝕、②歯肉炎及び歯周疾患、③その他の歯及び歯の支持組織の障害）の年齢階層別受診率を図2に示す。著明なのは、歯科3疾患において、5～9歳受診率が前後の年齢層に比較し高くなっていることである。同様に、う蝕に関しての受診率は、1位が5～9歳、2位が0～4歳である。これらのことから、歯科検診や保健指導が歯科領域疾患の早期発見、早期治療へ繋がっているとの評価もできるが、同時に、乳幼児期の口腔ケアは口腔疾患の予防として十分に機能していないのではないかと推察できる。また、高等教育機関で学ぶ年代層の20歳から、歯肉炎及び歯周疾患の増加は徐々に顕著になっていくことも、問題として捉えておく必要がある。



図2 歯科3疾患の年齢階層別受診率⁴

一方、世界保健機関（WHO）オタワ憲章（1986）にてヘルスプロモーションとは「人々が自らの健康とその決定要因をコントロールし、改善することができるようにするプロセス」⁵であると定義されている。また、厚生労働省健康情報サイトのe-ヘルスネットには「口腔の健康状態は全身的な健康状態と密接な関連がある」⁶との記載がある。健康の決定要因をコントロールするという視点から考えると、口腔ケアは全身の健康状態と密接に関係があり、そのため、乳幼児期の口腔ケア習慣は、その後の歯科疾患の有無や全身への影響に大きく関わることになる。それは、乳幼児期においては、口腔ケアそのものとその習慣を獲得するというところに、生涯にわたる健康志向への波及効果が期待されるということである。

しかし、日本小児歯科学会（2014）の「幼稚園・保育所一体化に伴う乳幼児歯科保健のあり方」においては、「幼稚園教諭や保育士の教科の授業の中に歯科保健教育の義務づけを行うべきである」⁷と提言している。つまり、その乳幼児期に深い関わりを持つ保育士及び幼稚園教諭の養成過程において、その重要性は看過されているということである。

³ 厚生労働省（2017）「国民医療費の概要」、前掲。

⁴ 健康保険組合連合会（2020）「平成30年度の歯科医療費の動向に関する調査」

https://www.kenporen.com/toukei_data/pdf/chosa_r02_10_06.pdf、（最終閲覧日：2022年2月8日）。

⁵ 日本ヘルスプロモーション学会 <https://plaza.umin.ac.jp/~jshp-gakkai/intro.html>、（最終閲覧日：2022年3月13日）。

⁶ e-ヘルスネット <https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/teeth-summaries/h-01/>、（最終閲覧日：2022年3月12日）。

⁷ 一般社団法人日本小児歯科学会（2014）「幼稚園・保育所一体化に伴う乳幼児歯科保健のあり方」https://www.jspd.or.jp/common/pdf/hoken_arikata.pdf、（最終閲覧日：2022年2月8日）。

養護という視点に着目すると、保育所保育指針（2017）においては、養護の理念について「子どもの生命の保持及び情緒の安定を図るために保育士等が行う援助や関わり」⁸と意義づけられている。なかでも「生命の保持」に関するねらいには、「一人一人の子どもの健康増進が、積極的に図られるようにする。」⁹とあり、対応する内容としては、食事、排泄、衣類の着脱、身の回りを清潔にすることなどであり、この「身の回りを清潔にすること」の中に「口腔の清潔」が含まれる。このように保育における養護の視点からも、乳幼児期からの口腔ケアは子どもの健康増進を図り、子どもが生涯にわたって健康な生活を送るために波及する行為として重要な要素であると言える。

さらに、3歳以上児の領域「健康」の内容に「自分の健康に関心を持ち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う。」¹⁰という一文がある。保育所保育指針解説（2018）では「子どもなりに自分の体を大切にしなければならないことに気付かせ、手洗い、歯みがき、うがいなど病気にかからないために必要な活動を自分からしようとする態度を育てることが必要である。」¹¹と解説されている。このことから、園生活の中で歯みがきやうがいなどの口腔ケアについては、継続的に取り組んでいくことが望ましい。その継続的な取り組みが、一人ひとりの口腔ケアへの興味・関心を高めることへ繋がり、成長とともに自律的な活動として子ども自身が口腔ケアを実施できるようになっていく。そして幼児期に確立した口腔ケアの習慣が、生涯にわたる歯科疾患の予防意識を高めていくと考えられる。

これらのことから、筆者らは、保育士養成課程における乳幼児期の口腔ケアについて、指導していくうえでの指針となる事項を検討していく必要があるのではないかという見解に至った。また、受講対象となる年代の学生達が持つ、口腔ケアに対する認識も明らかにしていく必要があり、潜在的に育っているヘルスプロモーション能力の有効活用も併せて検討することとした。

2. 研究の目的と方法

前述のように、保育士養成課程において、乳幼児期の口腔ケア教育をどのように位置付ければ良いのかを探るために研究に着手した。よって、本研究の目的は、保育士養成課程での乳幼児期の口腔ケア教育のあり方を提言し、その養成教育の充実のために寄与するものとする。

研究の方法として、まず、先行研究を概観し、保育士養成課程での乳幼児期の口腔ケア教育の問題点を整理した。次に、教科書では乳幼児期の口腔ケア教育がどのように扱われているのかを確認し、その傾向を明確にした。さらに、学生に対し、自身の口腔ケアへの意識、自身の健康観との関連はどのようなものかを探るためにアンケート調査を行った。最後に、これらの結果を考察し提言の論述を行うものとした。

3. 先行研究

乳幼児期の口腔ケア指導に関わる研究について概観する。

まず、土屋ら（2017）は、わが国の学校における歯科保健活動の問題点として、児童生徒への健康診断の義務化、口腔保健教育の実施のみであることを挙げ、「小学校から高校までの定期健診の

⁸ 厚生労働省（2017）「保育所保育指針」

https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00010450&dataType=0&pageNo=1、
（最終閲覧日：2022年2月10日）。

⁹ 厚生労働省（2017）「保育所保育指針」、前掲。

¹⁰ 厚生労働省（2017）「保育所保育指針」、前掲。

¹¹ 厚生労働省（2018）「保育所保育指針解説」<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000202211.pdf>、（最終閲覧日：2022年2月11日）。

実施や歯科保健対策が、大学生の定期健診や口腔内の健康に対する関心、自己の健康管理に繋がっていない。」¹²と述べている。ここからは、ライフステージのその時その時に、歯科保健対策が講じられているものの、個人のセルフケア力（自己健康管理能力）の獲得には及んでいないと捉えられる。このことを裏付けるように、前述の図 2 において 20 歳以降から、歯肉炎及び歯周疾患の増加が徐々に始まっていく現象は顕著である。大学生の口腔内の健康への関心の低さやセルフケア力（自己健康管理能力）の未熟さは、土屋らの指摘の通りであることが推察される。

また、高齢者の口腔内雑菌と不顕性誤嚥の関係について田中ら（2008）は、「口腔ケアを行うことによって、肺炎の発症を約 40%減少させる成績が得られている。」¹³と述べている。加えて、その成果は歯の有る無しに関わらないことにも言及している。これらのことから、口腔ケアは全身の疾患と密接な関係があるとともに、口腔ケアとは、歯磨きのみに限定されるものではなく、口腔全体を清潔にすることが重要であるということになる。この研究は乳幼児期の口腔ケアに言及したものであるが、乳歯萌出以前の口腔ケアを考える際には、大変参考となるものである。

次に、村松（2019）は、保育士養成課程の各教育科目の目標及び授業内容に歯科保健内容は含まれていないことを指摘した上で、歯磨き指導のできる保育士養成を目指した口腔ケア教育の成果を報告している。その報告において学生は「歯磨きの難しさや個人差等に気づき、歯磨き指導での子どもの現状や対応を予測し、具体的な指導内容や虫歯予防策を考え、歯磨きの習慣化は保護者の役割であり、歯磨き指導では子どもの気持ちを考えた関わりが重要であると認識していた。」¹⁴と述べている。これは、口腔ケア体験は、口腔内の清潔にとどまらず、子どもとの信頼関係構築にも効果があるということになる。言い換えれば、子どもへの口腔ケア援助は、虫歯予防のみの効果に留まらず、様々なことに波及効果があることを示している。しかし、村松の研究においては、全身の健康に繋がる視点での口腔ケア指導内容は含まれていない。

これらの先行研究から、口腔ケアについての問題として次のようにまとめる。①様々な歯科保健対策が大学生のセルフケア力獲得には繋がっていないこと、②口腔ケアは全身の健康管理と関係があること、③口腔ケアとは歯磨きに限定するものではないこと、子どもへの口腔ケアの援助には様々な波及効果があるにも関わらず、④教育内容に十分に取上げられていないこと、などである。

これらのことを踏まえ、筆者らは、口腔ケアが「歯磨き」技術に留まらない全身の健康づくりとの関係性に着目した上での教育が必要であり、生涯にわたるセルフケア力の獲得について乳幼児期から意識していく必要があるのではないかという見解に至った。しかし、保育士養成課程において、その視点が十分でないことが指摘されている。そこで、指導書としての教科書にどのように口腔ケアについての記載がなされているのかを確認することとした。

4.教科書記載の比較

乳幼児の口腔ケアについて教科書ごとの記載内容を比較し、まとめたものを表 1 に示す。口腔ケアは、幼児期の大切な基本的な生活習慣であり、養護の重要な演習項目である。そのため、「子どもの保健」「子どもの健康と安全」の演習用教科書での比較とした。

¹² 土屋はるみ・山下晏佳里他（2017）「大学生における口腔内健康状態と歯科保健行動の課題」『川崎医療福祉学会誌』川崎医療福祉大学、27（1）、P51.

¹³ 田中志子・出雲祐二他（2008）「口腔の健康が全身の健康へ及ぼす影響」『ヘルスサイエンス・ヘルスケ』深井保健科学研究所、8（1）、P3.

¹⁴ 村松十和（2019）「保育者養成における口腔ケア体験に関する一考察 -乳幼児と保育者の役割体験を振り返った分析から-」『教育研究報告集 2019』帝京短期大学、P13.

記載の概要をみると、口腔ケア領域について積極的に記載していない教科書もあるが、う歯¹⁵予防としての歯磨き、フッ化物塗布について記載している教科書が多い。また、永久歯や歯列（歯並び）に及ぼす影響など、成長していく過程での問題に関わることや口腔ケアが虐待の発見に繋がることについての記載は、口腔ケアの波及効果として捉えられる。

表 1 口腔ケア記載についての教科書比較

出版社・発行年	教科書名	掲載ページ	記載の概要
ミネルヴァ書房 2020.4.30	子どもの保健と安全 演習ハンドブック	P188～P199	う歯の永久歯への影響 乳歯萌出後の口腔ケアの重要性
ミネルヴァ書房 2020.12.1	子どもの健康と安全	P46～P47	う歯の原因と予防 乳歯の口腔ケアの重要性 虐待や歯並び
中央法規 2019.2.20	子どもの健康と安全	P170	コラム欄への記載 歯科健康診断の活用
中山書店 2021.1.10	子どもの健康と安全	P162～P163	う歯が招く全身への影響 う歯予防や歯科健康診断 乳歯萌出後の口腔ケア
青踏社 2019.3.23	子どもの健康と安全	P40 P55 P59	歯磨き支援演習の事例（2事例） う歯予防
診断と治療社 2020.3.31	子どもの健康と安全 演習ノート	P79～P80	う歯の原因と予防 う歯と歯並びの関係
ななみ書房 2019.9.1	子どもの健康と安全		口腔ケアについての記載なし

これらのことから、口腔ケアの直接的、波及効果について述べられている教科書があるものの、口腔ケアについての記載がなかったりコラム欄へ記載されていたり、学習内容の統一がなされていないことが明らかとなった。さらに、口腔ケアと健康との関係性に言及している教科書は見当たらず、しかも、乳歯萌出後の口腔ケアに限定されている。言い換えれば、口腔ケアは歯のケア（歯磨き）としてのみ取り扱われており、健康への意識と口腔ケアが連動しているという扱いはなされていない。

5. アンケート調査の実施

前述のように、口腔ケアは歯のケア（歯磨き）として取り扱われている状況の中、学生自身の口腔ケアへの意識の程度やその意識と健康観との関連性はあるのかという問いを立て、アンケート調査を行った。

5.1 調査の方法とアンケート内容

調査の方法は表 2 の通りである。M 短期大学の全学生 329 名にアンケートを行い、回収は 298 件であった。回収率は 91% であり、無効データはなかった。

表 2 調査の方法

調査対象：M 短期大学の全学生 329 名	調査期間：2021 年 11 月～12 月
調査方法：Web による調査（Google フォームを利用） 選択式および記入式アンケート 36 問（5 件法…35 問、任意記述…1 問）	

¹⁵ 「う蝕」と「う歯」は同じ病変を示す。

アンケート内容については表 3 に示す。質問項目は、口腔ケアへの関心、4～6 歳の口腔ケア経験、ヘルスケア行動、ヘルスマネジメント行動、口腔ケアへの理解、基本的な生活習慣への興味を軸に、妊婦のセルフケア行動意図尺度¹⁶や主観的歯磨き行動尺度¹⁷を参考にしながら、筆者ら 3 人で項目の選定を行った。また、回答には、意見や認識、行動を測定する方法であるリッカート尺度を用いた。

表 3 アンケートの内容

『口腔ケア』に関するアンケート調査	
次の内容について最も近いものを選んでください。	
①全くそうでない ②あまりそうでない ③どちらとも言えない ④ややそうである ⑤非常にそうである	
1. 自分の歯や口腔の健康状態について知りたい。 2. 歯みがき粉や歯ブラシなど歯や口腔状態を良くする道具に興味・関心がある。 3. むし歯の予防方法や口腔の健康状態を良くする方法に興味・関心がある。 4. 歯の色や歯並び等を良くする方法に興味・関心がある。 5. 症状がなくても健康のために定期的な歯科受診をしている。 6. 毎日の口腔ケア時に歯ぐきの腫れや歯の状態を観察している。 7. 毎食後の口腔ケアを心がけ、習慣化されている。 8. 4～6歳の頃、家庭や学校などで歯磨きの指導を受けることに、興味・関心をもっていた。 9. 4～6歳の頃、歯みがきを自ら進んで行っていた。 10. 4～6歳の頃、興味を持って歯科検診（歯科受診）を受けていた。 11. 4～6歳の頃、家庭や学校などで歯磨き方法（ブラッシング等）について指導を受けていた。 12. 4～6歳の頃、周りの大人による歯みがきの「仕上げ磨き」を習慣として行ってもらっていた。 13. 4～6歳の頃、1日に1回以上の歯みがきをしていた。 14. 4～6歳の頃、予防（歯石除去、フッ素塗布、矯正を含む）的な治療よりも、むし歯治療の目的で歯科受診していた。 15. できれば、定期的な健康診断を受けようと思う。 16. 身体の変化に注意しようと思う。	17. 自分の体調や状況について知りたいと思う。 18. 体調が悪い時には、早めに受診しようと思う。 19. 健康に気をつけて生活環境を整えようと思う。 20. 自分は健康だと思う。 21. 健康のため、食事に気をつけようと思う。 22. 健康のため、運動をしようと思う。 23. 健康のため、睡眠に気をつけようと思う。 24. 健康のため、清潔にしようと思う。 25. 現在よりもっと健康になりたいと思う。 26. 口腔ケアの知識や技術を学習することに興味や期待がある。 27. 自分の歯を健康に保つことは、全身の健康につながる意義のあることだと思う。 28. 口腔ケアの意義や技術について、自分が誰かに伝えたいと思う。 29. 幼児期から口腔ケアへの意識付けは大切である。 30. 乳歯がはえる前でも口腔ケアは大切である。 31. 食事：授乳や食行動などに関する内容に興味がある。 32. 排泄：おむつ交換やトイレでの排泄援助などに関する内容に興味がある。 33. 衣服：種類や着脱などに関する内容に興味がある。 34. 清潔：手洗いや入浴、歯みがきなどに関する内容に興味がある。 35. 睡眠：お昼寝や生活リズムなどに関する内容に興味がある。 36. 子どもの『口腔ケア』の教育について、どのようなものが必要だと考えるか。（自由記述）

¹⁶ 堀洋道監修（2012）『心理測定尺度週VI』サイエンス社出版。

¹⁷ 川西順子・神光一郎（2020）「中学生の歯科口腔保健行動とセルフエスティーム」『口腔衛生会誌』日本口腔衛生学会、70、pp11-18.

5.2 倫理的配慮

学生に対し、調査協力は自由であり調査途中でも離脱は可能であること、それによる不利益は発生せず成績とは無関係であること、回答をもって同意の判断とすることなどを説明した。なお、本研究は宮崎学園短期大学研究倫理審査会にて承認を受けている。(承認番号：2021006)

5.3 分析の方法と調査結果

1～35問の質問項目について、探索的因子分析を行い、その結果を踏まえ質問項目間の相関を分析した結果、並びに、36問目の自由記述項目についてテキストマイニングによる分析を行った結果を記載する。前者の分析には、分析ソフトウェアの「IBM SPSS」を用い、後者の分析には、フリーソフトウェアの「KH Coder」を用いた。

5.3.1 因子分析の結果

1～35問の質問項目を用いて、探索的因子分析（最尤法・PROMAX回転）を行った結果について表4に示す。

表4 探索的因子分析の結果

カテゴリー名	質問項目	簡略化した質問	因子負荷量			
			1	2	3	4
口腔ケアへの興味	むし歯の予防方法や口腔の健康状態を良くする方法に興味・関心がある。	方法への興味・関心	0.856	0.040	-0.019	0.014
	歯みがき粉や歯ブラシなど歯や口腔状態を良くする道具に興味・関心がある。	道具への興味・関心	0.740	0.036	-0.049	0.106
	自分の歯や口腔の健康状態について知りたいと思う。	口腔健康状態への興味・関心	0.715	-0.007	0.024	-0.015
	歯の色や歯並び等を良くする方法に興味・関心がある。	歯の色や歯並びへの興味・関心	0.589	0.014	0.222	-0.118
健康認知	健康のため、睡眠に気をつけようと思う。	健康 睡眠	0.053	0.774	-0.069	-0.046
	健康のため、食事に気をつけようと思う。	健康 食事	-0.072	0.723	0.048	0.041
	健康のため、運動をしようと思う。	健康 運動	0.012	0.657	-0.131	0.072
	健康のため、清潔にしようと思う。	健康 清潔	0.211	0.579	0.084	-0.163
健康行動	自分の体調や状況について知りたいと思う。	自分の体調への興味	0.171	-0.149	0.848	-0.105
	身体の変化に注意しようと思う。	身体の変化への注意	-0.021	0.129	0.765	-0.036
	幼児期から口腔ケアへの意識付けは大切である。	幼児期の口腔ケアへの意識付け	0.130	-0.107	0.522	0.054
	体調が悪い時には、早めに受診しようと思う。	体調が悪い時の対応	-0.162	0.182	0.484	0.126
	健康に気をつけて生活環境を整えようと思う。	健康 生活環境	-0.112	0.347	0.483	0.095
	乳歯がはえる前でも口腔ケアは大切である。	乳歯萌出以前の口腔ケア	0.088	-0.083	0.436	0.138
口腔ケアへの期待	口腔ケアの意義や技術について、自分が誰かに伝えたいと思う。	口腔ケアの意義や技術 伝えたい	-0.066	-0.015	0.038	0.705
	口腔ケアの知識や技術を学習することに興味や期待がある。	口腔ケア学習への興味・期待	0.263	0.031	0.050	0.611

因子抽出法: 最尤法 回転法: Kaiser の正規化を伴う PROMAX 法、7回の反復で回転が収束

固有値 1 以上で因子のスクリープロットを用いた固有値の変化と因子の解釈可能性を考慮し、4 因子が抽出された。その因子について、各因子に含まれている質問項目とから、第 1 因子を「口腔ケアへの興味」、第 2 因子を「健康認知」、第 3 因子を「健康行動」、第 4 因子を「口腔ケアへの期待」と命名した。次に、これらの因子を手がかりに、学生の口腔ケアへの意識についての質問項目の相関を分析した。

5.3.2 相関分析の結果

相関分析の結果を表 5 に示す。黄色の部分、やや強い正の相関が見られたところである。

表 5 相関分析の結果

n=298

※Pearson の相関係数	口腔ケアへの興味				健康認知				健康行動				口腔ケアへの期待				
	方法への興味・関心	道具への興味・関心	口腔健康状態への興味・関心	歯の色や歯並びへの興味・関心	健康睡眠	健康食事	健康運動	健康清潔	自分の体調への興味	身体の変化への注意	幼児期の口腔ケアへの意識付け	体調が悪い時の対応	健康生活環境	乳歯萌出以前の口腔ケア	口腔ケアの意義や技術伝えたい	口腔ケア学習への興味・期待	
口腔ケアへの興味	方法への興味・関心	1	.696**	.609**	.587**	.280**	.260**	.227**	.404**	.489**	.440**	.330**	.261**	.373**	.314**	.258**	.545**
	道具への興味・関心		1	.561**	.493**	.294**	.253**	.192**	.324**	.434**	.376**	.285**	.278**	.339**	.312**	.294**	.506**
	口腔健康状態への興味・関心			1	.509**	.237**	.193**	.206**	.313**	.414**	.354**	.367**	.187**	.258**	.299**	.207**	.430**
	歯の色や歯並びへの興味・関心				1	.277**	.278**	.170**	.312**	.496**	.417**	.406**	.234**	.302**	.279**	.196**	.378**
健康認知	健康睡眠				1	.534**	.466**	.492**	.287**	.395**	.185**	.328**	.434**	.194**	.242**	.312**	
	健康食事					1	.492**	.461**	.295**	.433**	.275**	.358**	.476**	.240**	.235**	.369**	
	健康運動						1	.369**	.215**	.323**	.159**	.159**	.340**	.169**	.202**	.337**	
	健康清潔							1	.353**	.432**	.329**	.296**	.454**	.279**	.155**	.317**	
健康行動	自分の体調への興味								1	.671**	.491**	.369**	.469**	.400**	.206**	.417**	
	身体の変化への注意									1	.381**	.480**	.590**	.361**	.279**	.425**	
	幼児期の口腔ケアへの意識付け										1	.233**	.309**	.543**	.219**	.358**	
	体調が悪い時の対応											1	.593**	.257**	.249**	.327**	
	健康生活環境												1	.308**	.319**	.400**	
	乳歯萌出以前の口腔ケア													1	.223**	.359**	
口腔ケアへの期待	口腔ケアの意義や技術伝えたい														1	.527**	
	口腔ケア学習への興味・期待															1	

** p<.01
0.4 ≤ |r| ≤ 0.7 やや強い正の相関関係 (黄色)

まず、カテゴリーの「口腔ケアへの興味」を軸に相関する項目を見てみると、カテゴリーの「健康行動」である「自分の体調への興味」や「身体の変化への注意」にやや強い正の相関がある。このことから、学生は、口腔ケアが自分の体調管理の一環であるということに意識を持っていると言える。この結果は、意識についての調査結果であるものの、問題とされていた大学生の口腔内の健康への関心の低さやセルフケア力（自己健康管理能力）の未熟さを指摘するものとは異なる。さらに細かく見ると、質問項目の「歯の色や歯並びへの興味関心」と「幼児期の口腔ケアへの意識付け」間にやや強い正の相関があることから、「幼児期の口腔ケア」の意義を歯色や歯列に関わると認識している可能性がある。しかし、質問項目の「口腔ケア学習への興味・期待」は「乳歯萌出以前の口腔ケア」と「幼児期の口腔ケアへの意識付け」それぞれの間において、弱い正の相関にしかない。このことから、学生の意識は、自分の健康管理としての「口腔ケアへの興味」はあるものの、「乳幼児期の口腔ケア」については「歯の色や歯並びへの影響」として捉えていると言える。

5.3.3 テキストマイニングによる分析結果

質問項目 36 の「子どもの『口腔ケア』の教育について、どのようなものが必要だと考えますか。」に対する学生の自由記述データを基に「KH Coder」にて分析を行った。

まず、形態素解析にて語を切り出し、頻出の傾向を確認した後、その関係について共起ネットワークにより分析を行った。複数語の検出には、語の切り出しが細やかな「茶筌」を選択した。

分析対象となったデータは 207 文で、共起関係の絞り込みは描画数 60 に設定した。また、語の取捨選択処理を名詞とサ変名詞、タグとし、その抽出語のうち頻度上位 10 を表 6 に示す。「口腔ケア」は複合語として 15 あり、「口腔」19 および「ケア」17 にそれぞれ含まれていた。抽出語は、「歯磨き」が 101 と最多で、次に「歯、習慣」が出現するが頻度はそれほど高くはない。

表 6 頻度上位 10 の抽出語
207 文、総抽出語数 2,638 (使用 : 521)

抽出語	頻度	抽出語	頻度
1. 歯磨き	101	6. 虫歯	18
2. 歯	28	7. ケア (口腔ケア)	17 (15)
3. 習慣	28	8. 指導	15
4. 口腔 (口腔ケア)	19 (15)	9. 磨き	11
5. 子ども	18	10. 仕上げ	10

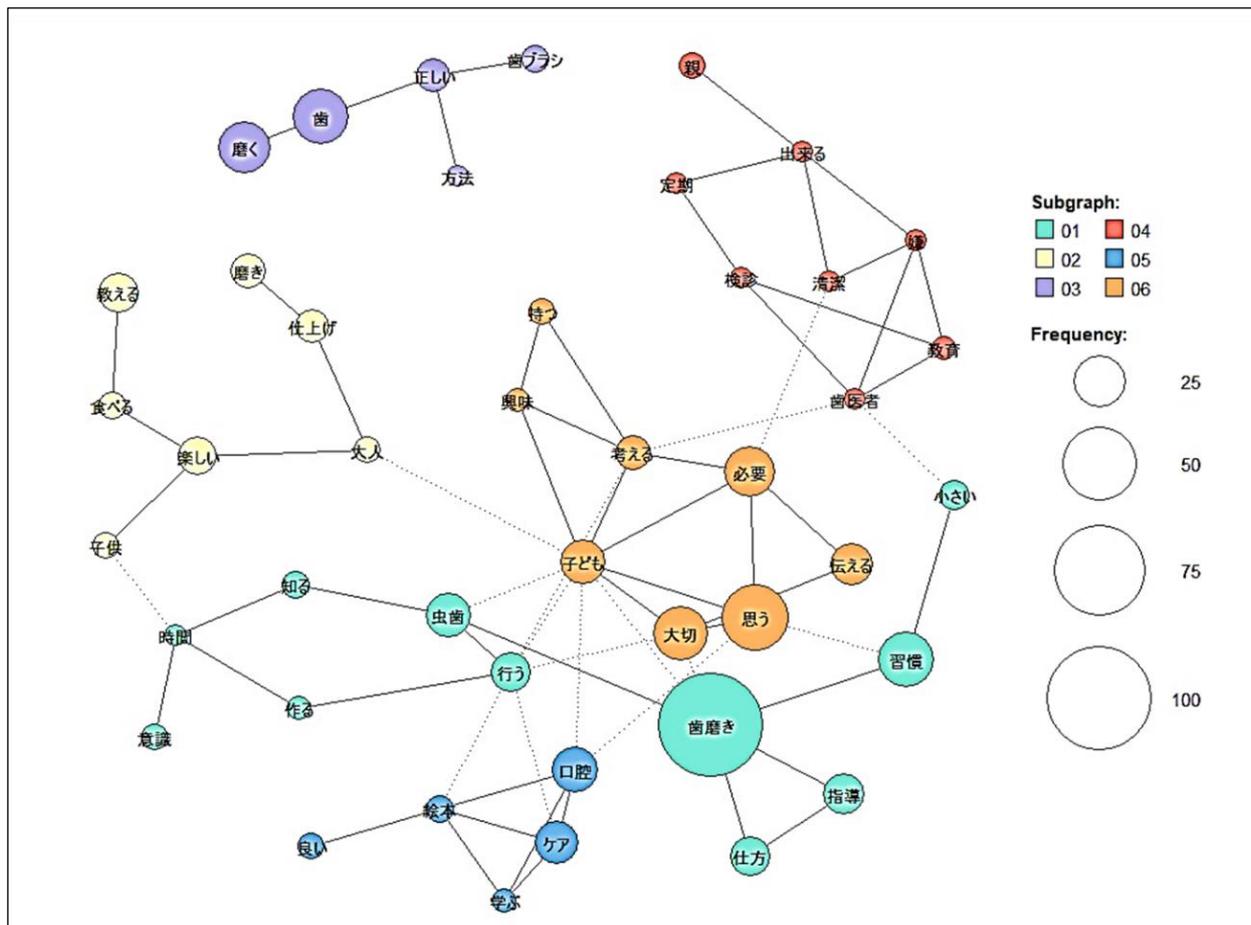


図 3 共起ネットワークによる分析結果

共起ネットワークによる分析結果を図 3 に示す。

図 3 から、「歯磨き」「指導」「虫歯」「習慣」「仕方」に強い共起関係がある。また、「口腔」「ケア」「絵本」「学ぶ」にも特徴的な共起関係がある。しかし、この 2 者間には、注目するような関係性は現れていない。さらに、関係性についての確認のため、KWIC コンコーダンスを用いて 3 つの抽出語に追加条件を与え、左右 1～5 語に出現する語を集計した結果を表 7 に示す。表 7 から「歯磨き」では『指導、習慣等』のスコアが高く、「口腔、ケア」では『方法、専門等』が、わずかながら抽出され、2 者間に共通する語は「子ども」「方法」のみであった。やはり、特記すべき関係性は無いと言える。

表 7 KWIC コンコーダンスによる集計

追加条件：左右 1～5 文字に出現する語の集計

歯磨き (スコア)	口腔 (スコア)	ケア (スコア)
1. 指導 (8.583)	1. ケア (15.000)	1. 口腔 (15.000)
2. 習慣 (5.833)	2. 子ども (1.000)	2. 子ども (0.667)
3. 子ども (2.783)	3. 方法 (0.750)	3. 意識 (0.500)
4. フッ素 (1.583)	4. 専門 (0.533)	4. 興味 (0.500)
5. 方法 (1.500)	5. 写真 (0.500)	5. 実施 (0.500)

これらのことより、学生たちは、「歯磨き」とは子ども自身が身につけるべき養護の項目、つまり基本的な生活習慣の一つであると捉えており、幼児期の自律的な歯磨き習慣確立のための「指導」が必要として高く認識していることが分かる。「口腔ケア」とは「学ぶ」べき専門性の高い知識であると捉えていることが分かる。しかし、これらの関連性についての認識は薄い。しかも、全身の健康に繋がる語は見当たらない。

6. 考察

保育士養成課程において、乳幼児期の口腔ケア教育をどのように位置付ければ良いのかを探るために研究を行ってきた。その結果について考察を行う。

まず、乳幼児期の口腔ケア教育を巡る問題について整理をする。

第一の問題として、乳幼児期の口腔ケアは、口腔疾患予防として十分に機能していない可能性がある。歯科口腔保健の観点から、乳幼児期からの口腔ケアは、口腔ケアそのものの効果とその習慣を獲得するということが、生涯にわたる健康志向への波及効果として期待されている。さらに、養護の視点からも、口腔ケアは、子どもの健康増進を図り子どもが生涯にわたって健康な生活を送るための行為として捉えられている。しかし、0～9 歳までの歯科 3 疾患の年齢階層別受診率を見ると、その受診率の高さから、統計上の結果ではあるが、乳幼児期の口腔疾患予防が十分に行われているとは言えない。これらのことから、乳幼児期の口腔ケアを理解し実践し、保護者にも指導、伝達ができる保育士の養成が必要である。

第二の問題として、大学生の口腔内の健康への関心は低くセルフケア力（自己健康管理能力）は未熟、ということがある。高等教育機関で学ぶ年代層の 20 歳から歯肉炎及び歯周疾患での受診率増加が著明になる現象は、乳幼児期や義務教育の間に行われてきた、歯科検診や口腔保健指導の施策が十分に機能していないということを示唆している。乳幼児期の口腔ケアの意義を理解するためにも、学生自らの口腔内の健康への関心やセルフケア力（自己健康管理能力）を高める教育が必

要である。

第三の問題として、口腔ケアは歯磨きに限定するものではないこと、全身の健康管理に関連があることについて、教科書には記載されていない。このことを前提として、授業設定の見直しを行う必要がある。

次に、学生の持つ口腔ケアへの意識についてのアンケート分析結果について整理をする。

因子分析の結果、「口腔ケアへの興味」、「健康認知」、「健康行動」、「口腔ケアへの期待」の4因子が抽出された。これらを踏まえ、相関分析を行った結果、学生は、口腔ケアが自分の体調管理の一環であるということに意識を持ち、口腔ケアへの興味も抱いている。ところが、乳幼児期の口腔ケアについては、歯の色や歯並びへの影響に関わることとして捉えており、全身の健康との関連には至っていない。さらに、テキストマイニングによる分析結果から、「歯磨き」とは子ども自身が身につけるべき基本的な生活習慣の一つであると捉え、「口腔ケア」とは「学ぶ」べき専門性の高い知識であるとし、両者の間に共起関係はない。いずれにしても、学生の持つ口腔ケアへの意識が、全身の健康への意識に繋がっているという結果は得られていない。これらのことは、それぞれの知識が独立しており関連性を持ちにくい状況になっているということであり、関連性を持たせた教授の仕方が望まれるということである。

しかし、学生は「健康行動」である「自分の体調への興味」や「身体の変化への注意」と「口腔ケアへの興味」に関連した意識を持っていたことから、これを潜在的なヘルスプロモーションとして捉え、保育士養成課程での乳幼児期の口腔ケア教育に活かすべきだと考える。筆者らの考えた口腔ケア教育モデルのフレームを図4に示す。

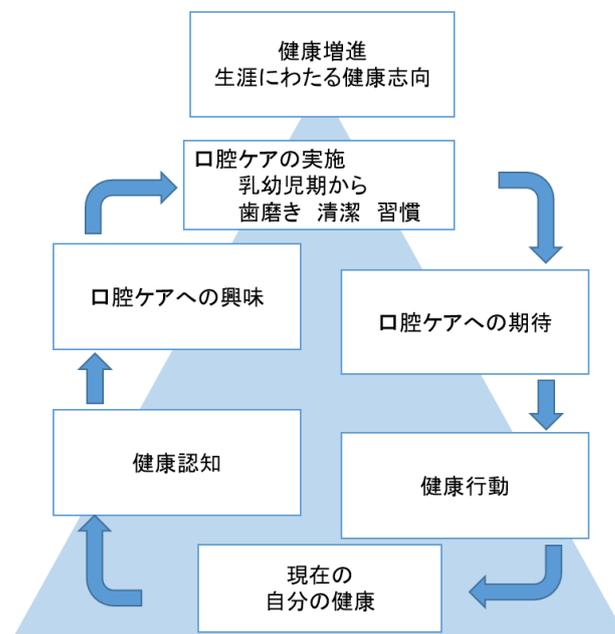


図4 保育士養成課程での乳幼児期の口腔ケア教育モデル

学生の持つ、潜在的なヘルスプロモーション能力を活かし、口腔ケアが健康増進や生涯にわたる健康志向に繋がるものであるということを発信していく必要がある。口腔ケアの方法として、歯磨きという指導技術は必要だが、一番は口腔内の清潔を保つという視点に着目させなければならない。そして、健康のために、生活（睡眠、食事、運動、清潔）を整えるという健康認知が、口腔ケアの在り方にも影響するということを知り、さらに、口腔ケアについてもっと学びたいという期待

が健康行動に影響し、学生自身もさらにより良い健康を目指せる好循環の教育が望まれる。また、これらのことについて、この分野に携わる教員の共通理解が必要である。自分の健康維持のための口腔ケアであるという意識こそが、乳幼児の口腔ケアの理解を促す糸口となるものである。このように、う蝕や歯列異常などの歯科領域疾病予防への視点は重要であるが、全身の健康との関連について教授することが必要であることを提言する。

7. おわりに

保育士養成課程において、乳幼児期の口腔ケアの教育をどのように位置付ければ良いのかを探るために研究に着手した。そして、研究の目的を、保育士養成課程での乳幼児期の口腔ケア教育のあり方を提言するとし、研究を進めてきた。その結果、学生の持つ、潜在的なヘルスプロモーション能力を活かし、口腔ケアが健康増進や生涯にわたる健康志向に繋がるものであるということを発信していく必要があること、口腔ケアについてもっと学びたいという期待が、健康行動に影響すること、そして、この分野に携わる教員の共通理解が必要であることを提言した。これらは、決して、う蝕を始めとした歯科領域疾患予防を軽視するものではなく、口腔ケアを全身の健康との関連について教授することが必要であるということを強調したものである。

この研究では、どのようにして教えるのかの教授法については触れていない。具体的な教授内容や方法については、今後の課題とする。また、学生達のアンケートについて様々な角度での分析を試みた。しかし、口腔ケア意識と健康意識の高群や低群の特徴、例えば、幼少期における口腔ケア経験などとの関係などを抽出することは出来なかった。今後も研鑽を重ねていきたい。

<引用・参考文献>

1. 一般社団法人日本小児歯科学会（2014）「幼稚園・保育所一体化に伴う乳幼児歯科保健のあり方」
https://www.jspd.or.jp/common/pdf/hoken_arikata.pdf、（最終閲覧日：2022年2月8日）。
2. e-ヘルスネット <https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/teeth-summaries/h-01>、（最終閲覧日：2022年3月12日）。
3. 大西文子編著（2021）『子どもの健康と安全』中山書店出版。
4. 川西順子・神光一郎（2020）「中学生の歯科口腔保健行動とセルフエスティーム」『口腔衛生会誌』日本口腔衛生学会、70、pp11-18。
5. 健康保険組合連合会（2020）「平成30年度の歯科医療費の動向に関する調査」
https://www.kenporen.com/toukei_data/pdf/chosa_r02_10_06.pdf、（最終閲覧日：2022年2月8日）。
6. 厚生労働省（2017）「国民医療費の概要」<https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/teeth/h-01-002.html>、（最終閲覧日：2022年2月8日）。
7. 厚生労働省（2017）「保育所保育指針」
https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00010450&dataType=0&pageNo=1、
（最終閲覧日：2022年2月10日）。
8. 厚生労働省（2018）「保育所保育指針解説」<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000202211.pdf>、（最終閲覧日：2022年2月11日）。
9. 小林美由紀編著（2020）『子どもの健康と安全 演習ノート』診断と治療社出版。
10. コリー.M.デニス著（2013）『オレム看護論入門 セルフケア不足看護理論へのアプローチ』医学書院。
11. 歯科口腔保健の推進に関する法律（平成23年法律第95号）
https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/shikakoukuuhoken/dl/01.pdf、
（最終閲覧日：2022年2月7日）。
12. 田中志子・出雲祐二他（2008）「口腔の健康が全身の健康へ及ぼす影響」『ヘルスサイエンス・ヘルスケ』

深井保健科学研究所、8 (1)、pp3-8.

13. 土屋はるみ・山下晏佳里他 (2017) 「大学生における口腔内健康状態と歯科保健行動の課題」『川崎医療福祉学会誌』川崎医療福祉学会、27 (1)、pp51-60.
14. 中根順子・佐藤直子編著 (2019) 『子どもの健康と安全』ななみ書房出版.
15. 日本ヘルスプロモーション学会 <https://plaza.umin.ac.jp/~jshp-gakkai/intro.html>、(最終閲覧日：2022年3月13日).
16. 堀洋道監修 (2012) 『心理測定尺度週VI』サイエンス社出版.
17. 松田博雄・金森三枝編著 (2019) 『子どもの健康と安全』中央法規出版.
18. 松本峰雄監修 (2020) 『子どもの保健と安全演習ハンドブック』ミネルヴァ書房出版.
19. 丸尾良浩・竹内義博編著 (2020) 『子どもの健康と安全』ミネルヴァ書房出版.
20. 村松十和 (2019) 「保育者養成における口腔ケア体験に関する一考察 -乳幼児と保育者の役割体験を振り返った分析から-」『教育研究報告集 2019』帝京短期大学、pp7 - 13.
21. 文部科学省ホームページ「「21世紀における国民健康づくり運動」におけるヘルスプロモーション」https://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/houshi/detail/1369172.htm、(最終閲覧日：2022年2月8日).
22. 八木利津子・平松恵子・新沼正子編著 (2019) 『子どもの健康と安全』青踏社出版.